

## 桜の便り

桜の季節の前に旅立ったあなた  
残された私は呼吸もできず闇に沈んだ  
いつの間にか  
心に鎧を纏い  
齒を食いしばり彷徨い続けた  
魂の叫びが聞こえぬように

月日が流れ  
すっかり年老いた私には  
錆びた鎧が重すぎる  
私は私に戻りたい

一呼吸し  
見つめ直す  
その哀しみの先に

靄の中から溢れ出す  
淡い春の香り  
白い病室で

「一緒にお花見に行こうね」と  
あなたが言って  
その日  
二人で心に描いた  
一面の薄桃色